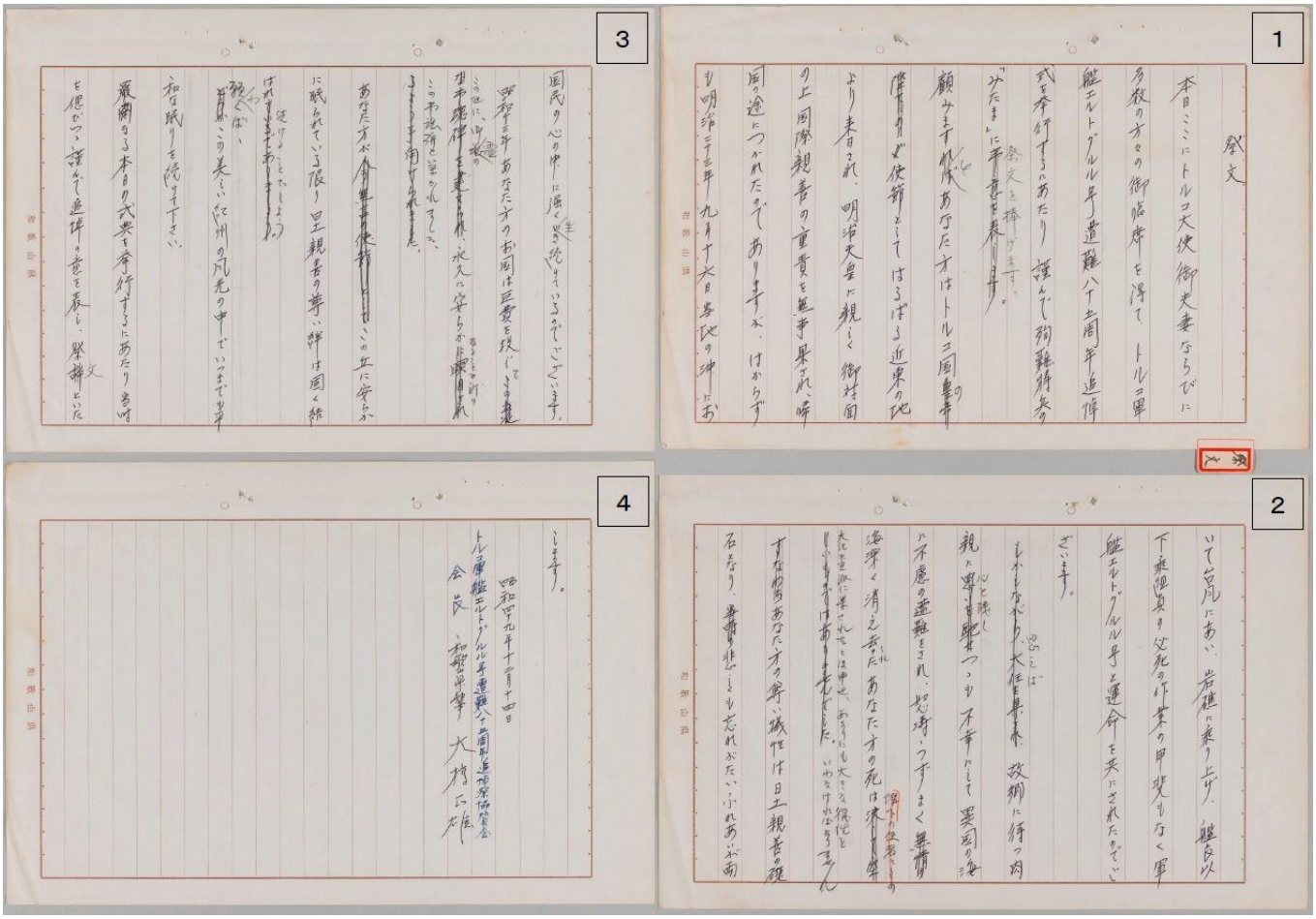
エルトゥールル号の遭難　―悲劇の記憶から友好の象徴へ―

1890 年に串本町樫野埼(かしのざき)沖で発生したオスマン帝国の軍艦エルトゥールル号の遭難は、死者 500 名以上の大きな被害をもたらしました。和歌山県が作成した「トルコ慰霊祭」に関する公文書からエルトゥールル号の遭難に対する県知事の受け止め方や日本とオスマン帝国・トルコ共和国の国際関係の変化を見ていきます。

1　資料

【資料 1】1974(昭和 49)年 85 周年追悼祭大橋正雄知事祭文



＊資料全体のデジタル画像を見る

祭文

本日ここにトルコ大使御夫妻ならびに多数の方々の御臨席を得て、トルコ軍艦エルトグルル号遭難八十五周年追悼式を挙行するにあたり謹んで殉難将兵の「みたま」に祭文を捧げます。

顧みますとあなた方はトルコ国の使節としてはるばる近東の地より来日され、明治天皇に親しく御対面の上国際親善の重責を無事果され、帰国の途につかれたのでありますが、はからずも明治二十三年九月十六日当地の沖において台風にあい、岩礁に乗り上げ、艦長以下乗組員の必死の作業の甲斐もなく軍艦エルトグルル号と運命を共にされたのでございます。

思えば、故郷に待つ肉親に心を残しつゝも不幸にして異国の海に不慮の遭難をされ、怒涛うずまく海深く消え去られたあなた方の死は大任を立派に果されたとは申せ、あまりにも大きな犠牲といわなければなりません

あなた方の尊い犠牲は日土親善の礎石となり、悲しくも忘れがたいふれあいが両国民の心に中に強く生き続けているのでございます。

昭和十三年あなた方のお国は巨費を投じてこの地に、御霊の永久に安らかなることを祈りこの弔魂碑を築かれました。

あなた方がこの丘に安らかに眠られている限り日土親善の尊い絆は固く結ばれ続けることでしょう。

願わくば、この美しい紀州の風光の中でいつまでも平和な眠りを続けて下さい。

厳粛なる本日の式典を挙行するにあたり当時を偲びつゝ謹んで追悼の意を表し、祭文といたします。

昭和四十九年十二月十四日

トルコ軍艦エルトグルル号遭難八十五周年追悼祭協賛会

会長　和歌山県知事　大橋正雄

2　解説

（1）近代のオスマン帝国

16 世紀にアジア、ヨーロッパ、アフリカにまたがる地域を支配したオスマン帝国は、多民族国家として繁栄していました。しかし、19 世紀には、ロシアやイギリスなどの列強諸国の進出と、ギリシアやエジプトなどの各地の独立や自治の動きに悩まされます。この危機に直面しオスマン帝国の知識人は、西洋的な国家の仕組みをつくろうとしました。1876 年にはミドハト憲法が発布され、宗教を問わず帝国内の諸民族を平等なオスマン人とみなすオスマン主義が掲げられました。しかし、1878 年、ロシア=トルコ戦争を口実としてスルタン[1]のアブデュル=ハミト 2 世によって憲法は停止されました。

（2）エルトゥールル号の遭難

1889 年 7 月、アブデュル=ハミト 2 世は親善使節として軍艦エルトゥールル号を日本へと送り出しました。この派遣の目的の 1 つに、イスラーム世界の統一を目指すパン=イスラーム主義[2]を宣伝することがありました。そのため、アデン（アラビア半島）、ボンベイ（インド）、シンガポール（マレー半島）などイスラーム教徒が多く住む地域に寄港しながら 1890 年 6 月、横浜に到着し、明治天皇に謁見（えっけん）しました。同年 9 月 15 日、エルトゥールル号は横浜を出発しましたが、翌日、串本町大島の樫野崎（かしのざき）沖で暴風雨によって沈没し、587 名の人々が亡くなりました。現場近くの大島村（現在の串本町大島）の人々は、遭難者たちを救助し、69 名が生還しました。

（3）本資料について

本資料は、1974(昭和 49)年、串本町で開催された追悼式で和歌山県知事大橋正雄[3]が読み上げた祭文(弔辞)の原稿で、和歌山県の公文書「トルコ慰霊祭関係」の簿冊に含まれています。

追悼式は、大島村によって 1891(明治 24)年に行われた「追弔会」に始まります。そのときの県知事石井忠亮 [3] が発表した文章は、死亡者への慰霊やその後の救助活動に関することが中心で、遭難を悲劇として記しています。その後、10 年ごとに小規模な式典が行われてきました。

1924(大正 13)年に日本とトルコ共和国[4]の国交が樹立されたことをきっかけに、1928(昭和 3)年の追悼式は両国の経済活動の拡大を目指した日土貿易協会が主催する大規模なものになりました。当時のトルコは建国直後で外交的に孤立状態だったため、多くの国との友好関係を築こうとしていました。このときの県知事野手耐 [3] の文章には「両国の交誼一層敦厚ヲ加ヘ、交通日ニ繁カラントス。」「只使節一行ノ偉勲今日ノ修睦ヲ致シタル」とあり、エルトゥールル号の渡航が、両国の往来の増加や友好につながっているとされています。

第二次世界大戦後、追悼式は串本町の主催となり、遭難は国家間の友好の象徴として語られるようになりました。1974(昭和 49)年に発表された本資料では、「あなた方の尊い犠牲は日土親善の礎石となり、悲しくも忘れがたいふれあいが両国民の心の中に強く生き続けている」と記され、遭難が日本国民とトルコ国民の友好の礎になるとされています。

1985 年、イラン・イラク戦争(1980-88 年)の際、イランのテヘランに残された日本人をトルコの救援機が救出した出来事以降、エルトゥールル号遭難の救助が、両国友好のはじまりとして幅広い人々に知られるようになりました。

---

[1] イスラーム世界における「支配者」の称号のこと。19 世紀のオスマン帝国では、スルタンがイスラーム共同体のウンマの指導者であるカリフを兼ねるとされました。

[2] 19 世紀にイラン生まれのアフガーニーが提唱し、ヨーロッパ列強の脅威を乗り越えるためにムスリムの連帯を訴えました。アブデュル=ハミト 2 世は、自身のカリフとしての称号を重視して、パン=イスラーム主義によって国内外のムスリムの支持を集めようとしました。

[3] 大橋正雄(在職 1967-75 年)、石井忠亮(在職 1889-91 年)、野手耐(在職 1927-29 年)

[4] 第一次世界大戦後崩壊したオスマン帝国に代わり 1923 年に成立した国家の一つ。オスマン帝国とは異なり、トルコ人の国家建設を目指しました。トルコ国内にはトルコ人以外の民族もいますが、20 世紀前半には母語の使用を認めないなど同化政策を進めました。現在でもトルコなど複数にまたがって居住するクルド人の独立運動が起こり大きな課題となっています。

3　活用のポイント

- **中学校社会〔歴史的分野〕の場合…A 歴史との対話**

  身近な地域の歴史を調べる活動の際に、エルトゥールル号の遭難について取り上げ、解説シートをもとに日本とトルコの友好の歴史を学ぶことができます。

- **歴史総合の場合…A 歴史の扉　　世界史探究の場合…D 諸地域の結合・変容**

  エルトゥールル号の遭難に対する受け止め方の変化と歴史的背景を考察する活動ができます。19 世紀末のオスマン帝国や日本について解説シートから学び、次にパネル展示「公文書、歴史資料となる」の解説を読み、遭難への認識の違いから、各時代の歴史的背景を考察します。例えば、1928(昭和 3)年では、建国直後のトルコ共和国が、他国との友好関係、特に経済的な結び付きを重視したことがわかります。また、1974(昭和 49)年の本資料にはエルトゥールル号を「トルコ国の使節」と記され、オスマン帝国とトルコ共和国を同一視する記述がみられ、トルコ共和国との国家間の友好を強調しています。これらの遭難に対する捉え方を比較し、私たちはこの遭難をどのように捉えるべきかを考察し、議論する活動ができます。

- **公共の場合…A 公共の扉**

  本資料から公文書の役割を考察することを通して民主主義について学ぶことができます。公文書は、国や地方公共団体が業務の過程で法律や制度に基づき作成・取得した文書や記録のことです。本資料は、和歌山県職員の担当者が追悼祭での知事祭文等の案を作成し、部長や副知事などが文書を修正・承認し、最終的な承認を知事がおこなっています。公文書を読み解く活動を通して、「なぜ公文書を作成したり、保存・公開したりする事が重要なのか。」と問いかけることで、公文書には国民や県民への説明責任を果たす役割や過去の事実を将来に伝える役割があり、国民や県民が主権者として国政や県政に対する政治判断をできる環境をつくることが民主主義の根幹となっていることを学ぶことができます。

4　出典

・和歌山県公文書　整理番号 D2023-0005-1263「トルコ慰霊祭関係」
※文書群の詳細については、「トルコ慰霊祭関係」をご覧ください。

5　関連資料・ウェブサイト等

・「公文書、歴史資料となる－「和歌山県章募集一件」と「トルコ慰霊祭関係」の紹介－」（和歌山県立文書館）
・賀川純一編「土国軍艦遭難者追弔祭典書」赤川孫兵衛、1891 年（国立国会図書館デジタルコレクション）
…1891 年の式典のときの和歌山県知事の文章が記載されている。編者の賀川純一は、遺体・遺品回収に協力し、追弔会を指導した人物。1920 年代に小作争議を支援し、日本農民組合を結成した賀川豊彦の父。
・日土貿易協会編「土耳古国軍艦エルトグロール遭難追悼記」1929 年（国立国会図書館デジタルコレクション）
…1928 年の式典のときの和歌山県知事の文章が記載されている。
・「日本とトルコの絆をつないだ物語」（串本町）
・「特別展示 日本とトルコ－国交樹立 90 年－」（外務省外交史料館）

6　参考文献

・和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史　近現代 1』和歌山県、1989 年
・小松香織『オスマン帝国の近代と海軍』山川出版社、2004 年
・今井宏平『トルコ現代史』中央公論新社、2017 年
・服部一秀「メタヒストリー学習にとっての比較の意味 ： ドイツの歴史教科書における記念日学習単元を手がかりにして」『山梨大学教育学部紀要』2018 年